

政策二一ズに対応した果樹・茶品種の開発

【研究計画概要】

研究期間：令和7年度～令和9年度

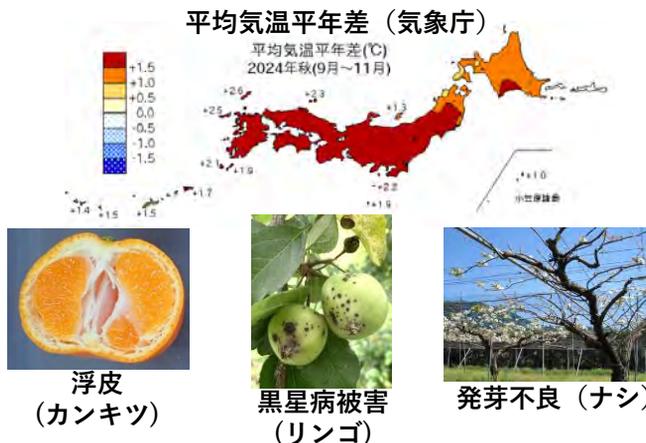
研究部門：農研機構・果樹茶業研究部門

共同研究機関：愛媛県農林水産研究所、長崎県農林技術開発センター、鹿児島県農業開発総合センター、山形県庄内総合支庁

協力機関：系統適応性検定試験の参画研究機関（各自治体の公設試）

1. 研究背景・目的

近年の気候変動の影響により、果樹・茶の生産現場では、発芽不良や霜害の発生、高温による品質低下などの問題が頻発化している。また、農業者の減少・高齢化により生産量は減少しており、生産基盤が脅かされている。これを解決するために、果樹・茶の生産基盤の強化に資する品種の開発が必要である。これまでに農研機構はこの課題の解決に資する育種素材を先導的に探索・育成してきた。そこで、本研究では、果樹・茶の生産基盤の強化に資するため、これまでの蓄積を活用して、気候変動に適応可能な特性や、省力化・農薬の削減に資する特性を備えた品種の育成を加速化する。



温暖化の進行により1946年の統計開始以降高温の記録の更新が続き（上図）、環境変動に影響を受けやすい果樹では様々な被害が深刻化している（下図）

2. 研究内容

系統適応性検定試験中の早生や晩生のチャ品種、黒星病抵抗性のリンゴ、極早生のモモ、浮皮が発生しにくいカンキツ、東北向けの極早生甘ガキについては、品種候補を中心に地域適応性や特性の評価を行い、品種登録出願の判断に資する情報や実用化に向けた情報を収集する。

自家和合性・自家摘果性・黒星病抵抗性を併せ持つニホンナシでは、これらの3形質を併せ持つ実生個体の選抜を進める。発芽不良リスクを軽減するナシおよび霜害リスクを軽減するウメでは、発芽に必要な低温要求量を調査し、低温要求量の低い交雑実生の中から優良個体の選抜を進める。

本研究で開発を進める果樹・茶品種

品目	対応課題	開発目標
チャ	気候変動対応	初霜害回避可能な早生 晩霜害回避可能な晩生
リンゴ	気候変動対応 ・農薬削減	黒星病抵抗性
モモ	気候変動対応	発芽不良リスク対応
ニホンナシ	気候変動対応	発芽不良リスク対応
ニホンナシ	労働生産性向上 ・農薬削減	結実管理省力・ 黒星病抵抗性
カンキツ	気候変動対応	浮皮しにくい早生
カキ	気候変動対応	極早生甘がき
ウメ	気候変動対応	霜害リスク対応

3. 達成目標

労働生産性の向上、気候変動への対応により果樹農業・茶業の生産基盤の強化に資するため、以下の品種や有望系統を開発する。

- 初霜害回避可能な早生のチャ、発芽不良リスクの少ないモモをそれぞれ1品種開発。
- 黒星病抵抗性のリンゴ、浮皮しにくい早生のカンキツ、自家和合性・自家摘果性・黒星病抵抗性を併せ持つニホンナシ、東北向けの極早生甘ガキ、晩霜害回避可能な晩生チャについては、品種候補を開発。
- 発芽不良リスクの少ないニホンナシ、霜害リスク低減に資するウメについては有望系統を開発。